

製造者責任

山牧田 湧進



【まえがき】

※【ご注意ください】

- ・この作品はフィクションです。実在の人物・地名・団体等とは一切関係ありません。
- ・この作品は成人ゲイ向け官能小説であり、男性同性愛を語っています。
- ・同性愛に嫌悪感を抱く方はご覧にならないよう、お願い申し上げます。
- ・この作品は表現の誇張、強調や省略のある、必ずしも現実には即していないファンタジーであることをご了承ください。
- ・特に作品中の性的描写は、現実の性交渉における性病等のリスクを意図的に排除しています。現実と混同しないよう、ご注意ください。
- ・この作品は想像して楽しんでいただくものです。現実との区別を付けられず、犯罪や迷惑行為に及ぶ危険のある方はご覧にならないでください。

【あらすじ】

本来、繋がっていないはずの現実世界と小説世界。
リアルワールド

作者の妄想力を持ってすれば瞬時に行き来可能！

さらに接点が無いはずの異なる小説の主人公達を同時に瞬時に呼び出してエツ
ちなムフタイムも自由自在！

いえ、実はこれは製造者責任を全うしているだけなのです。

性欲、精力を持たせて過ぎてしまったがために常に持て余して困っている主人
公へお詫びとして性欲処理のお手伝いをするため。

散々無理やり生ハメ強要までされた挙句全てギリギリ中出し回避という苦行を
するハメになった主人公へお詫びとして中出しさせてあげるため。

初体験の話まで進まずに未だ未体験の主人公に初体験させてあげるため。

あと一人は、特に文句言われてないけど作者がイけるしセックスならなんぼで

も出来るという主人公なのでその方も呼び出して。

都合4人の小説内で無茶させられた精力溢れる主人公達をお呼びして、お詫びに作者の肉体を使って性欲処理をしていただこうという、作者が小説主人公に対して製造者責任を取る、身も蓋も無い言い方をするの特にお気に入り4人の小説主人公に作者が代わる代わる抱かれまくるという超絶誰得なお話です。

勿論、作者の濡れ場なんて最高に要らないしキモいので全カットしておりますので、そこはご安心を。

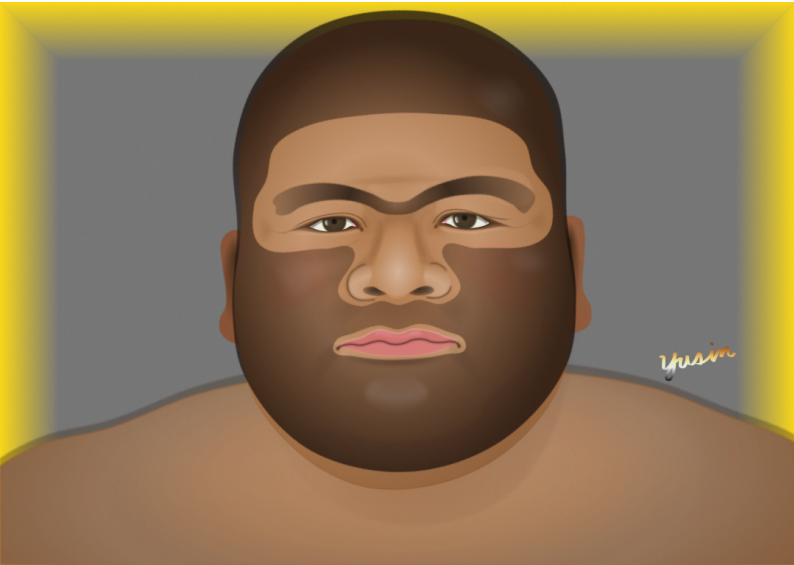
とは言っても誰得であることに変わりはないので重々お気を付けください。
4人の主人公と筆者がわちゃわちゃ会話進行するのがメインです。



・犬養 耕（いぬかい おさむ）

『白熊山荘』『黒熊 meets 伝説の白熊』『白熊が見た淫夢』『Staring 犬養耕』『地下牢で処刑を待つ日々（白熊が見た淫夢2）』『暗がりで見会った男たち』『性を売る王様（白熊が見た淫夢3）』『白熊の冬籠り』『分からせ対抗教習』と今回で10作品に登場する小説主人公。物語上の一人称「私」。だが、性的興奮が高まってくると、声のトーンが一段下がり「俺」に変わる癖がある。奇跡的な容姿を持ちつつも山奥に引き籠もって一人で半自給自足生活をしている人見知りの奥手。温厚で聡明、力持ち、と一人で生活を完結できる力量を備えた白熊だが、健康な肉体に宿る強大な性欲と精力を本人自身が気付かないように長年抑え込んできた結果少々破綻が見え始めていた。そこをある意味性のエキスパートでもある万道に見抜かれて救われて、今徐々にその本来の性欲を十分に満たし精力を開放して行く過程にある。一般に滅多にお目に掛かれないため、現実はその姿を見た人々から『伝説の白熊』と渾名されることがままある。作者の理想をこれでもかと注ぎ込んでいるため作者

の小説世界では世界一のイケメンと定義される。が当人には迷惑がられている。



・利根 万道（とね ばんどう）

『山奥の更生施設にて』『5、と過す犯られ三昧ツアー』『黒熊 meets 伝説の白熊』『白熊が見た淫夢』『Starring 犬養 耕』『地下牢で処刑を待つ日々（白熊が見た淫夢2）』『暗がりで出会った男たち』『性売る王様（白熊が見た淫夢3）』『白熊の冬籠り』『分からせ対抗教習』と今回で筆者の作品では最多となる11作品に登場する小説主人公。物語上の一人称「俺」。元性犯罪者、現更生させる側。キャッチフレーズは『一日3発』。副業として本人の特性を活かしてとことん犯し尽くすサービスを展開している。慰安旅行で訪れた先が偶然犬養の住む山荘で二人はそこで初めて出会うが、万道はそれ以前に酒場で『伝説の白熊』の話聞かされて覚えており、それが犬養のことであると気付く。暴走していた万道とひたすら抑え込む犬養は真逆のようにも見えたが根っこの本質は同じであると万道は見抜き、単なる利己でもあったが犬養に救い（だけでなく）の手を差し伸べた。更生施設ではやっぱり三男だが犬養と居るときは頼れるお兄ちゃん。吾妻という同じ職場の恋人が

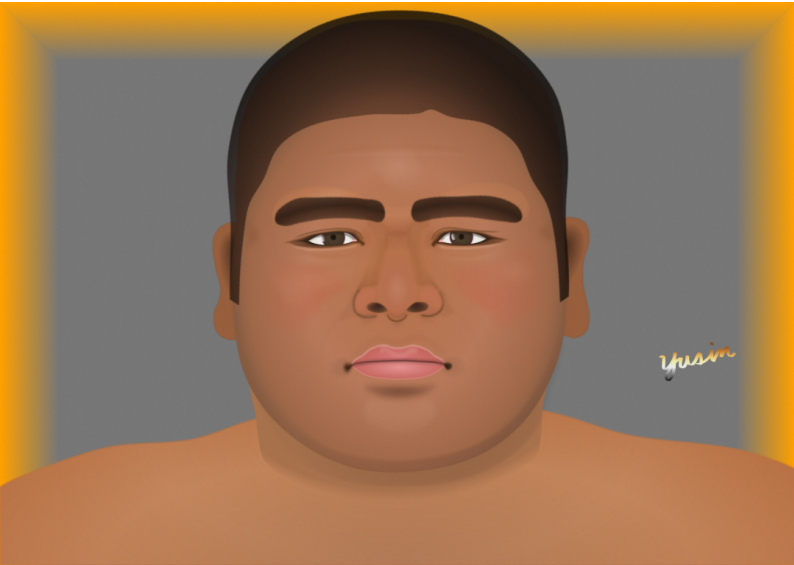
居るが同時に『伝説の白熊』のベストパートナーでもある『黒熊』。そのため犬養とはもう切っても切れない関係。今や性のオールマイティで非常に頼れる頼もしい存在であるため作者もついついこの登場人物には頼ってしまう。



・土佐 祐哉（とき ゆうや）

『我が子の性長記録』『父の知らない性育白書』『暗がりで出会った男たち』と今回で4作品に登場する小説主人公。物語上の一人称「僕」。女しか産まれないという呪われた家系に奇跡的に産まれた男の子。しかし、その奇跡のせいで良からぬ策略が図られて家族は引き裂かれ、女系家族に一人囲われることに。大切に育てられ伸び伸びと大きく育ったが、精通を機に精子を狙われるようになり、夜這いを受け、強制的にハメさせられ、生ハメセックスを強要されたりもしたが全て膣内射精はギリギリ回避して精子を奪われることなく成人を迎え囲われる状況から抜け出した。現在は引き裂かれた父方の姓に戻り父親と仲睦まじく暮らしている。白くキメ細かい肌で体毛も薄くむちむちパツパツの充実した肉付き。まあるくすべすべで皺の無い顔ながら、どこことなくゴリラに似た雰囲気を感じさせる目鼻立ちをしているため「白ゴリ」あるいは「白ゴリちゃん」と呼ばれた。見た目は苦勞知らずのお坊ちゃんっぽく見えるが弱冠二十歳にして壮絶な苦勞人。若いのに男。漢。その逞

しきは身体つきだけでなくセックスにも存分に現れている。



・出水田 陽出（いずみだ ようでる）

『保健実技演習』『ズリ友』『理科・生物 反射実験』『御恩返し返し』『悪魔羅祓いの儀／密室連続射精事件』『暗がりで出会った男たち』と今回で7作品に登場する小説主人公。物語上の一人称「俺」。珍しい名字に困ったキラネーム、ハーフ、DCにして既にゲイの自覚あり、しかも脂ギッシュでエネルギーシユな男性ホルモン出過ぎ系の太めオヤジが好みという超難儀な生い立ちを持つ。にも関わらず（？）何度も公開射精させられるという目に合う不憫な男子。しかし当人は極めてアクティブで、奇跡的に好みに合致する同級生と出会い猛烈アタックして事実上カップルのような関係に。身体もアソコも育ちが良く、第二次性徴のお手本として崇め奉られることも。さらに頭も良く、県内随一の進学校に通うが結局そこでも公開射精するハメに。はつきりと巨根だが太く発達した太腿と育ちの割には恥丘に余り肉が付いていないせいもあって勃起していいときは太腿や腹など周りの出っ張りに隠されて外見上股間は目立たない。もの凄く飛ぶ射精キングだが、連れである

ハゲデブメタボオヤジ風貌の同級生柴崎に扱かれると飛距離が格段に伸びるホームラン王。ただ、今のところ柴崎とはフェラまででハメるところまでは進展していない。

製造者責任

傾斜は特別酷くはないがクルマも満足に通れないような獣道をおおよそ2時間半も掛けて歩いて登らないと辿り着けない、あの、伝説の白熊が住まうとされる『白熊山荘』。

仮に衛星写真で見つけても安易には辿り着けないような僻地に、何故か毎晩のように訪れる人物が居るらしい。

「そりゃあ、作者さんが創った妄想の世界ですもの。山奥とか全く関係無しに徒歩0秒で来られるわけですよ」**犬養**

「いきなり発言がメタいですね、犬養さん」

「ええ。ここに居る私は作者さんに創られたものであるということを認識している犬養^{いぬかい} 耕^{おさむ}ですから」**犬養**

「認識していない犬養さんは？」

「今でも大半の時間を一人きりで過ごしているはずですよ」**犬養**

「なんか……済みません」

「それで、作者さんが毎晩のようにここに来られる理由ですが……？」 犬養

「それは勿論、筆者の創造世界の中では筆者の観点で見て一番のイケメンである
とされる犬養さんはある種筆者の心の恋人（片想い）ですので、こうしてちよ
ちよく訪問させていただいているわけですが、それ以外にもちょっとした理由が
ありまして……」

「ひょっとしてそこは私に言わせようとしています？ 分かりました、言いま
しょう」 犬養

「犬養さん、強くなりましたね」

「もう、万道さんにかなり救って戴きましたし、ここに居る私は作者さんを既に
何百、何千回と抱いて来ていますからね」 犬養

「筆者は紛うことなきブサメンなんですが、ここの犬養さんはそんな筆者でも相
手にしてくれるんですよね」

「作者さんに創られた犬養 耕ですので、作者さんを嫌うようには創られていな

いんですよ。ただ……」 **犬養**

「ただ？」

「あまりにも性欲も精力も強く創られてしまったので、処置に困るんですよ」

犬養

「メタ認識されていない犬養さんはひたすら困っていてそれをベースにお話が幾つか創られていますもんね」

「で、メタ認識している私としては作者さんに文句の一つも言いたいわけです。

もう少し普通にしていただきたい、と」 **犬養**

「作者としては世界一のイケメンは性欲も精力も世界一であって欲しいと思っているのです、そこは譲れませんね」

「というわけで、それじゃあこの有り余る性欲・精力はどうすれば良いのか、と。私は普段は一人ですし、近年ではやや濃い繋がりが出来たとも言える万道さんがいらっしゃるとはいえ万道さんにも万道さん自身の生活があるわけでそんなに私にばかり構って戴くわけにもいきませんし。どう責任取ってくれるんですか、

と」**犬養**

「と、イケメンに情熱的に迫られてしまったので、ここは**製造者責任**ということ
で、僭越ながら犬養さんの性欲処理を筆者が担いましょうと申し出まして、落と
し所として受け入れていただいている、というわけです」

「なんかハメられた気分は未だにしてはいるんですよ。だって、自分で言うのも
何ですが、……私は作者さんの一番好きな人に当たるわけですよね？」**犬養**

「はい。勿論です」

「そんな相手に手に負えないほどの性欲と精力を与えて、性欲処理を買って出
る、って、マッチポンプ感が半端ないんですけど」**犬養**

「はい、ぐうの音も出ません」

「ひょっとして私の方が作者さんの性欲処理にお付き合っているのではないかと
すら思えてしまうのですが」**犬養**

「おっしゃる Exactly です……」

「というわけで、実は作者さんの性欲処理だった、ということが判明したところで、本日は特別ゲストをお呼びしております」 犬養

「え？ 呼べるんですか？」

「実際には作者さんの妄想力が呼んでいるので私が呼び出したわけではないのですが」 犬養

「あれ、なんか既視感。……『Starring いぬかい 犬養 おさむ 耕』のときのやり取りと似てない？ これ」

「似て非なる感じかと思えますよ。『Starring』の犬養さんは私ほどメタ認識していませんし」 犬養

「そう言われてみればちょっと立場が逆っぽい感じ……」

「おう、便利だなあ作者さんの瞬間呼び出し能力。普段から一瞬でここに来られ

るようになると俺も捗るんだがなあ。犬養さんと自由に何発でもやれる」万道

「ば、万道さんには吾妻^{あがつま}さんも渡良瀬^{わたらせ}さんもいらっしやるでしょう？」犬養

「勿論、あの2人とも今までどおり自由にやったうえでの話よ？」万道

「相変わらずお強いですね。流石『一日3発』のキャッチフレーズは伊達ではない」犬養

「そんな俺より強いってんだから、犬養さんの性欲処理の労力たるや」万道

「それは言わないでください……」(赤面)犬養

と、こんな具合に犬養の住む白熊山荘に急遽、利根^{とね}万道^{ばんどう}が呼び出された。と

いうか、筆者が呼び出したのか……。

「あれ？ でもこれ、筆者が邪魔になりませんか？ 伝説の白熊と黒熊によるゴールデンカップルの間に割って入るとか……」

「あゝ、犬養さんは基本まだ受けとか出来ないから、犬養さんと2人だけだと俺が常に受けになって俺が突っ込める相手が居なくなるので、作者さんは居てくれ

でも全く問題無いぜ」万道

「相変わらず寛大で懐の深いお方。本当、好き♥」

「おいおい、今、俺の立ち位置そんなとこまで来てんの？ 最初は再犯を繰り返

すやさぐれた性犯罪者設定だったのに」万道

「性のオールマイティー、性のジョーカーみたいなものですからね、万道くんは」

「あの、前から不思議に思ってたんですけど、作者さんて私には『犬養さん』って『さん』付けなのに、万道さんには『万道くん』って『くん』付けなんですよね？ 私の方が万道さんより年下なんですけど」犬養

「それはだなあ、作者さんは犬養さんに対して恋愛感情とか憧れとか畏怖の念を抱いているから自然と『さん』になってて、俺に対してはセックスフレンドもしくは都合良く犯してくれる人って扱いだから『くん』なんだよ、きっと」万道

「……良く分析されてますね……」

「メタ認識している俺等は言わば作者さんの頭脳を共有している別立場の別キャラクターみたいなもんだからな」 万道

「要するにそれもこれも作者さんの手のひらの上、というか、妄想ワールドですよね」 犬養

「そういうこと」 万道

「んでもって、今夜のコトは書籍化するつもりなんだろう？」 万道

「良くお分かりで」

「だったら、特別にもう一人ここに呼んでみないか？」 万道

「どなたを？」

「一応画像化が出来ているからイメージがし易くて、俺達みたいにくっちゃん性周りで困ったことにさせらせて作者さんに対して鬱憤溜まっている奴」 万道

「鬱憤で……、えーっと、画像化出来ている、って時点で相当絞り込まれ……はするものの……」

「基本的に作者さんは登場人物に無茶させる人だからなあ。思い当たる節が多過ぎるんだろ」 万道

「それもあるけど、万道くんや犬養さんと接点ある人居たっけ？ っ
思っ……」

「ああ、無いよ」 万道

「無いのに知ってんの？」

「俺等、あんたの作品全部読んでもん、な？ 犬養さん？」 万道

「ええ、そうですね。それに、画像化出来ている人達は過去に一度作者さんの作品『暗がりで出会った男たち』上で一同に会して座談会を催していますからね。

接点が無いと言いつつ実は面識は一応あるという、ね」 犬養

「犬養さんは想像付いているんですか？」

「ええ、かなうり、無茶させられた人が居ますね」 犬養

「え？ あの、犬養さんが無茶って思うほどの無茶なんてさせたっけ……？」

「なんか、さらっと酷いこと言ってますか？ 私にこんなに無茶させておい

て」犬養

「あ、そうか。ここの犬養さんて、『白熊が見た淫夢』シリーズの作品も実体験レベルで記憶残っている人なんだっけ」

「そうですよ。私に大量の精液搾り出させて、超強力な滋養強壯の効能とか高濃度の魔素とか」犬養

「あれは本当に美味しい珍味なんだよ。あ、でも、別に淫夢の白熊さんじゃなくても、ここの白熊さんの精液も妙に美味しい体調良くなるからな」万道

「あ、だとしたら、ここの犬養さんはひょっとして受けが出来たりします？」

「あ、そこだけは残念ながら本当に夢止まりなんです」犬養
「なるほど」

「まあ、そこも多分作者さんの匙加減で簡単にひっくり返っちゃうところかと思えますけど」犬養

「なんだか、自分の力が恐ろしい……」

「いや、その力の及ぶ範囲は作者さんの妄想世界の中だけですからね。勘違いな

「さらないように」 犬養

「あ、確かに、そうでした」

「それでは無茶された若者よカモン！」 万道

「あの、こんばんは……」 土佐

「うわ、土佐^{とさ} 祐哉^{ゆうや}くん。今晚は。お久しぶりです。……ああああああ」

「作者さん、急にどうしました？」 土佐

「いや、無茶させた記憶が蘇って来まして。……恨んでる？」

「いえ、『暗がり』のときにもお話させていたいただきましたが、境遇が変えられないとすれば最善に近い形で救われていますので。ただ……」 土佐

「ただ？」

「我慢せずに中出ししちゃって良いって聞きました」 土佐

「!」(ぼわっ)

「作者さん、顔が赤いですよ」 犬養

「そ、そうだよねえ。あれだけ生本番強要されておきながら、我慢に我慢を重ねて寸でのところで結局出さずに切り抜けたんだものねえ」

「親父さんと仲良さそうだったし、親父さんに出したりとかはしてないのかい？」 万道

「いえ、父さんとは慎ましやかに仲良くやらせてもらっていますが、後ろを使ったことはまだ一度も無いですね、お互いに。口になら何度もありますけど」 土佐

「まあ、そういう形もありっちゃアリだわな。そういえば父親好きの息子がバリバリ父親をハメ倒してる作品もあったよな？」 万道

「あ、『夜這い息子』ですね。万道くんに言われるまで気が付かなかったんですけど、結構共通点があるんですよ、祐哉さんと哲也くん。イメージモデルにしてた方がどちらも力士で、しかも画像化した祐哉くんの顔が若干哲也くんのイメージにも似てるんですよ。哲也くんの画像化は出来てないけど」

「イメージモデル同士でも似てる？」 万道

「いや、そうでもないんですけど、画像化した祐哉くんの顔はちょうど両者の中
間みたいな顔になってて……」

「画像化したときは哲也くんのイメージモデルの方の存在は認識してたの？」

万道

「いいえ、知りませんでしたよ。結構年の差離れてますしね。哲也くんのイメー
ジモデルの方はまだまだ全然力士になる前ですもん、画像化したときは」

「しかし、そうかあ。中に出すの初めてかあ」 万道

「その相手が筆者なんかで良いんですかね？」

「ま、それも、作者さんを嫌うようには創られていない、ってことで良いんじゃない？ 実際、中出し出来るって聞いて来てるんだし。って、そうだ、初体験の
奴もう一人呼んでやろうか？」 万道

「どちらさんで？」

「俺の舎弟」万道

「？ 万道くんの舎弟？ って誰？ 万道くんが更生した性犯罪者とか？ でもそんな話はまだ書いてないよなあ……」

「性犯罪者が初体験ってどれほどあるんかね？ まあ、俺は全部未遂だったから当時はまだ童貞だったけど」万道

「あそっかあ。しかし、そうになると、むむむ？」

「ほら、作者さんが前に言ってたじゃん。顔のイメージモデルだけ同一人物だったけど画像化したら意外とかけ離れた感じになった若者」万道

「ああ、出水田^{いすみだ} 陽出^{ようでる}くんだ！」

「呼ばれて飛び出てじゃじゃ……って言っちゃマズいかここでは」出水田

「いや君幾つよ？」

「え？ あの話以降新作が出ていないようなのでDK1で止まっていますけど」出

水田

「なんでそんな昭和なネタがすんなり出てくんのよ？」

「それは作者さんの頭脳を共有している……」 出水田

「あーそうでしたそうでしたすみません。若者に古い知識を与えてしまつて」

「ところで、中に出しても良いって……」 出水田

「え？ 出水田くんまでそんなこと聞いて来たの？ ってか、出水田くんの初体験が筆者なんかで良いの？ 柴崎くんは？」

「いや、作者さんの方が良く分かってるんだろうけど、あいつにしろ、あいつの親父さんにしろ、明らかにタチ属性なのよ。もしデキるとしても少なくとも最初のうちは俺の方がウケになるだろうから、多分柴崎にはすぐには中出しは出来ないんだろ？ うな、って、まあ超長い年月を費やせば可能性は無くもないと思いますけどね」 出水田

「……そっか」

「それに、今はお話とは切り離された特別世界なので、今日の初体験は元のお話

の世界ではノーカン、というかりセツトされるというか、無かったことになるの
でご安心ください作者さん」出水田

「それは安心しました。というか、出水田くんの童貞食えるのか……」

「役得、……ですかね？」犬養

「製造者責任だろ」万道

「というわけで、ピチピチの若いのから脂の乗り切った俺までよりどりみどりで揃ったわけだが、作者さんはどういう順番で輪姦まわされたい？」万道

「うわなんて豪華な選択肢」

「作者さんが普段からアナニーで犯され妄想している相手の四天王がここに揃ったからな」万道

「それって要らない情報では？」

「ま、そんなことを追求し始めるとそもそもこんな作品要るか？　って話になり兼ねないから、今回はやりたい放題の無礼講ってことで良いんじゃないか？」

万道

「いつもな気がする……」

（こちらは体験版です）



製造者責任

OpusNo. Novel-095
ReleaseDate 2026-06-25
CopyRight © 山牧田 湧進
& Author (Yamakida Yuushin)
Circle Gradual Improvement
URL gi.dodoit.info

個人で楽しんでいただく作品です。

個人の使用範疇を超える無断転載やコピー、
共有、アップロード等はしないでください。

(こちらは体験版です)